

特別連載

「入試改革」の嵐の中で…

「新制大学」40年の軌跡

2

入試期日の周辺

究極の発明?

「夏休みの宿題」

名古屋大学教授 佐々木 享

大学入試の期日をいつにするか、いつになるかは、当の大学にとっても、受験生にとっても切実な問題である。今回は、入試期日をめぐる話題をとりあげよう。

日本も以前は九月始期制だった

入学試験は春に行われる、と昔から決まっていたわけではない。

日本近代文学の巨匠・夏目漱石(一八六七

—一九一六)の名作の一つ『三四郎』(一九

〇八)は、明治末年の東京帝国大学(東京大

学の前身)を舞台として話を展開している。東大・本郷の三四郎池の名は、この小説に由来している。

『三四郎』を読みすすむと、熊本的高等学校(第五高等学校)熊本大学の前身の一つ)を卒業して上京した三四郎が新学期が始まると知らされていた九月十一日に大学に行ってみると、教授も学生も誰もおらず、授業はなかったというくだりにでくわす。入学式という仰仰しい行事がなかったこと、実際の授業は規則より十日も遅くに始まったことなど、

今春の国立大入試で9大学が分離分割方式を導入した。来年は更に29大学がこの方式を導入するという。そうなると旧7帝大すべてが分離分割になるということで、これからの主流は間違いなく分離分割。A・B日程に加え、前・後期日程と益々“複雑・多様化”する昨今の入試状況だが、今月は「入試期間」の視点から40年の軌跡をたどっていただく。

のんびりした明治時代の大学生活が浮かびあがってくる。

小説の展開は原作にあたってもらうこととし、ここでは、かつてはわが国も西欧諸国と同様な学年 school year は九月に始められていたことに注目したい。おおむね、中等学校では九月一日から翌年七月三十一日まで、高校、大学では九月十一日から翌年七月十日までと定めていた。九月始期制の時代の入学試験は六月あるいは七月に行われるのがふつうだった。

学年四月始期制は一八八七(明治二〇)年に高等師範学校(筑波大の前身)を皮切りに採用され、師範学校(小学校教員養成の学校)、小学校に波及した。法令上に小学校の四月始期制が定められたのは一九〇〇(明治三三)年であった。西欧諸国にならった九月始期制を四月始期制に変えたのは、それ以前から実施されていた会計年度に合わせるためだったといわれる。

中学校・高等女学校は一九〇一年、高等学校はずつと遅れて一九一九年、大学は一九二一年に四月始期制に転換した。四月始期制では長期の夏休みが学年の途中にはさまることになるので、学業の中断を心配する教師たちが世界には珍しい「夏休みの宿題」なる悪習

(?) を發明したわけである。それはともかく、三四郎が生きた明治末年には、中学校の学年末(三月)と高校の始期(九月)との間に約五か月の間隙(カクヰキ)があった。この時期の高校入試は七月初旬だったことから、中卒の進学者希望者には、母校の補習科あるいは東京の予備校に通って受験勉強に励む余裕があったわけである。

### 九月始期制への転換問題

学年九月始期制への再転換は、第二次大戦直後の学制改革期に一度は検討されたが、支持がごく一部にとどまったため実現しなかった。しかし、近年は国際交流が盛んになったため、わが国の四月始期制の異常さは改めて自覚されている。

さき頃の臨時教育審議会(一九八四―八七年)も学年九月始期制への転換を熱心に検討したが、世論の支持がじゅうぶんでないとして結局見送ってしまった。新学年は桜の開花とともに始まるという想い(といってもこれは本州中部だけのことなのだ)は、意外に抜きがたいものらしい。もつとも、九月始期制への転換問題については、一時的に収入激減期の生ずることをおそれた私立学校側の反対も無視できなかったといわれる。学年始

### ●新制大学40年の軌跡

#### 【学年始期の切り替え】

盛岡高等農林学校(若手大農学部の前身、宮沢賢治の母校)などは、学年始期切り替え理由の一つに、中学校の学年末と上級学校との間にすぎ間があると、その間に徴兵される者が出る可能性もあるという事情をあげていた。この背景には、上級学校に在籍していれば徴兵は延期されたという制度がある。いまの若者にはわかりにくいかも知れないが、何年浪人しても徴兵の心配をせずにすむのは、平和主義の憲法がある故である。

ところで、学年を九月始期制から四月始期制に切り替えるに際しては、学校ごとに種々な方策がとられた。高校、大学の場合は、四月始期制になる前年・前々年に入学した生徒のさいごの学年を三月末で打ち切った。五か月(実質は三か月と少し)程短縮したわけである。中等学校の場合は、九月始期で入学した者の学年を卒業まで変えなかった学校が多い。しかしなかには東京府立一中のように、全校テストの成績で改めて全生徒を各学年に割りふって解決するという乱暴(一)なやり方をした学校もあった。

期、ひいては入試の時期が国際化するのほまだ容易ではないらしい。

### 大学の入試期日と高校教育

現代の日本では、高校の学年末は三月末日、大学の学年始期は四月一日と定められているから、大学入試は高校、大学のいずれかの学年の日程中に実施せざるを得ない。現実には大学入試期日は、本来ならば、高校教育の授業期間中である二、三月に、いわば高校教育に犠牲を強いるかたちで設定されている。国立大学の入試（二次試験）は三月初旬（最近は二月下旬）に始められるが、大半の私立大学はそれ以前つまり高校三年年の三学期半ばに入試を終えてしまうからである。共通一次（来年からは大学入試センター試験）に至っては、一月中旬に行われる。

旧学制下の官立（いまでいう国立）の高校・専門学校の入試は三月一六日以降に始めることを例としてきた。官立学校の入試を三月初旬、場合によつてはそれ以前に実施する方式は、第二次大戦末期の特殊な状況下に始まった悪習を継承したかたちになっている。量的には圧倒的に多い私立大学の入試が国立大学のそれに先んじて行われることを考えると、国立大学の入試期日繰り下げは、高校教

育充実のためにも切実な課題となっている。

### 国立大学の入試期日

#### 旧制方式から二期制へ

旧制の国立大学（七帝大、東京工大、東京商大、神戸商大、東京・広島の両文理大、官立医科大学）では、出願締切を二月十五日、入試期日を三月十五日以降と統一的に定めて一校のみ出願させていた。各大学を同等のものとみなしていたのである。旧制の場合、本来の大学入学資格者である高卒者の総数と国立大の入学定員総数はほぼ一致していたので、予定調和的に志願者が分散すれば、受験競争は起こらない筈であった。現実には、東京帝大のいくつかの学部のように五倍近い志願者が殺到するところがあり、他方では毎年二次募集する大学があった。

官立高校も、試験期日は第二次大戦末期のぞき三月二十日前後に一貫して統一されていた。三十校近い高校をすべて同等の学校とみなしていたわけである。試験問題をも統一していた時期の結果をみると、一高（東大の前身の一つ）、三高（京大の前身の一つ）などが際立った高得点者で占められたほかは、各高校間に大きな差はみられなかった。

官立専門学校の場合には、高等工業、高等

商業、高等農林など学校種別ごとに学校長が協議し、三月中・下旬の範囲内で二期ないし三期に分散するよう入試期日を設定していた。こうして、進学希望者には官立高校と専門学校、あるいは専門学校二ないし三校を受験する機会が与えられていたわけである。

(遠隔地所在の専門学校には、東京・京都・大阪・福岡などの大都市を選んで二ないし三か所に試験場を設ける学校が多かった。)以上は、もちろん学年始期が四月始期制に統一されて以後の話である。

一九四九(昭和二四)年の新制大学発足に際して、文部省は、国立大学の入試にいわゆる二期制を採用した。旧学制下では複数の官立学校を受験する機会が与えられていたという経緯に学んだのであろう。

二期制とは、国立大学の入試期日を一期(三月初旬、大ていの年は三月三日から)、二期(三月下旬、大ていの年は三月二三日から)に分け、全部の国立大学を、北大、岩手大、東北大、千葉大、東大……は一期、北海道教育大、室蘭工大、小樽商大……は二期とそれぞれの指定する方式である。一学期は二十日までに合格者を発表したので、受験生は一期校・二期校それぞれ一校に出願し、一期校の結果をみてから二期校の入試に挑戦

することができた。

どの大学をいずれの期とするかは文部省が指定した。変更を希望した大学もあったが文部省が認めなかったため、一期校・二期校の大学区分は三十年間ほとんど変わらなかった。

旧制帝大、戦前の旧制医大を前身とした学部をふくむ大学(千葉大など)はすべて一期と指定されていた。各期の総定員のバランスは保たれていたが、大学単位で指定したため、法学部が一期に偏るなど学部別あるいは地域的にみた場合の多少の不均衡は避け難かった。

一九七八(昭和五三)年まで三〇年間続いたこの方式は、高校側・受験生の側からは概して評判は悪くなかった。何よりも近年の方式にくらべると極めてわかりやすかつたし、受験生側からみると選択が容易であつた。

この二期制は共通第一次試験が導入された一九七九(昭和五四)年から廃止されたが、本来は両者は連動していたわけではない。一期校の入試に失敗した者が集中することを快く思っていない二期校側の圧力が連動させたといわれるが、筆者には解せない。一期校・二期校に格差があるとすれば、それは予算面等で差をつけている文教政策に原因があるのであつて、入試期日の設定方法がそれをつくりだしたとはいえないからである。

### ●新制大学40年の軌跡

【国立大学第一回入試は六月だった】

新制大学の多くは一九四九(昭和二四)年四月に発足したが、国立新制大学は同年五月三十一日に発足した。国立大学の創設は、①北海道・東京・愛知・大阪・京都・福岡をのぞき、同一府県下の官立学校を合併して一府県一大学を設ける、②国立大学の学部は他府県にまたがらない、③各府県に必ず教員養成学部を置く、④女子教育振興のために東西二か所に女子大学を設ける、などの原則にそって準備されたが、各府県・各学校の調整が難行し、四月発足に間に合わなかつたのである。このため新制国立大学の第一回入試は、一期校では六月八日から、二期校では同月一五日から行われた。この入試では、史上はじめて、商船大学以外のすべての国立大学が女子にも門戸を開放した。

なお、日本女子大、東京女子大、津田塾大、聖心女子大、神戸女学院大の五女子大をふくむ私立十一大学と神戸商大だけは、前年の四八年に新制大学として発足した。

偏差値のみによらない「新・大学選び」ができる!

「私大合格」

5月号好評発売中!